

# 第 10 回平塚市遺跡調査・研究発表会

誌上発表



令和 5 年 3 月  
平塚市教育委員会

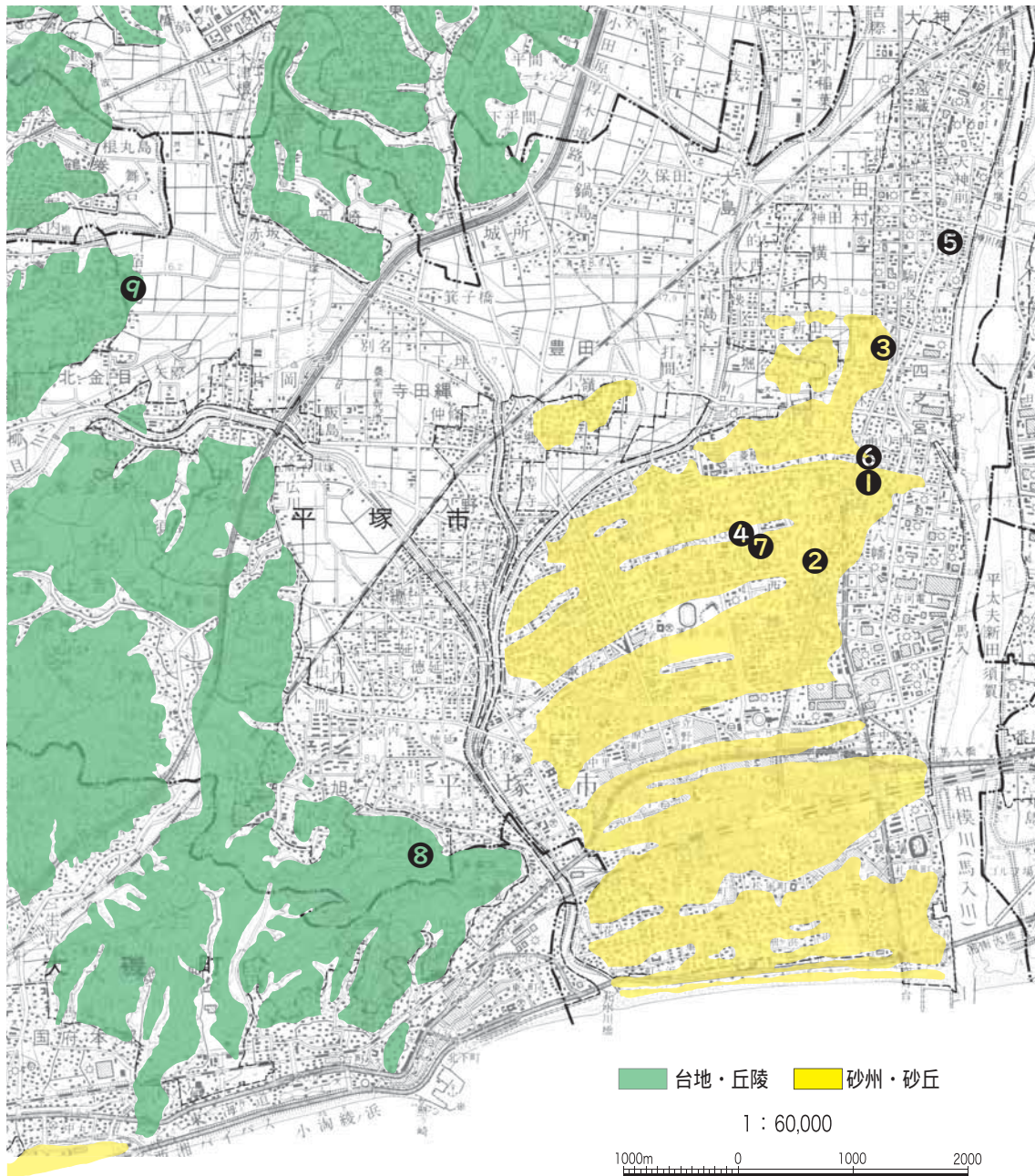


## 例 言

- 1 本書は、平塚市内遺跡で実施した埋蔵文化財調査成果及び研究成果を、公開することを目的として発行した。
- 2 令和4年度は新型コロナウイルスの感染拡大を考慮し、会場での発表会実施は中止とした。その代替として、令和3年度に平塚市内で実施した主要な発掘調査の成果を冊子に取りまとめることとした。また、例年発表会に併せて実施している博物館での資料展示も中止した。
- 3 本誌の作成にあたり、執筆をご快諾いただいた国際文化財株式会社の土任隆氏、有限会社吾妻考古学研究所の大坪宣雄氏、株式会社玉川文化財研究所の中村哲也氏、株式会社アーク・フィールドワークシステムの吉岡秀範氏に厚く感謝申し上げるとともに、各関係機関・地権者の皆様のご理解とご協力に厚く感謝申し上げます。

## 目 次

六ノ域遺跡第20地点	土任隆 / 国際文化財株式会社	1
諏訪前B遺跡第8地点	吉岡 秀範 / (株)アーク・フィールドワークシステム	5
道半地遺跡第9地点	大坪 宣雄 / (有)吾妻考古学研究所	9
構之内遺跡第7地点	中村 哲也 / (株)玉川文化財研究所	12
田村館跡第6地点	吉岡 秀範 / (株)アーク・フィールドワークシステム	17
平塚市教育委員会実施の調査成果	中嶋 由紀子 / 平塚市教育委員会	21
大会原遺跡 第8地点		
構之内遺跡 第8地点		
大畑A遺跡 第1地点		
真田宮ノ前遺跡 第1地点		



- ① ろくのいき 六ノ域遺跡 第20点
- ② すわまえ 諏訪前B遺跡 第8地点
- ③ どうはんち 道半地遺跡 第9地点
- ④ かまえのうち 構之内遺跡 第7地点
- ⑤ たむらやかたあと 田村館跡 第6地点

- ⑥ だいえばら 大会原遺跡 第8地点
- ⑦ かまえのうち 構之内遺跡 第8地点
- ⑧ おおばたけ 大畑A遺跡 第1地点
- ⑨ さなだみやのまえ 真田宮ノ前遺跡 第1地点

# 六ノ域遺跡第 20 地点

土 任隆

国際文化財株式会社

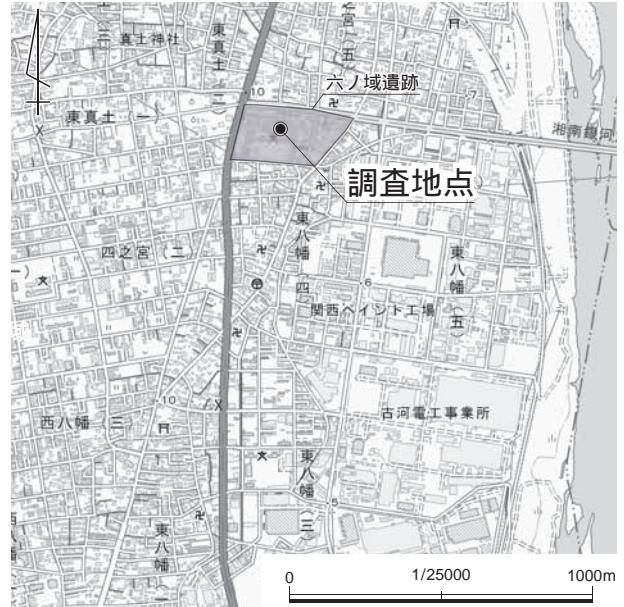
**所在地** 平塚市東真土二丁目 1 番 50 号地内  
**調査機関** 国際文化財株式会社  
**調査担当** 土任隆 木田真  
**調査期間** 令和 3 年 6 月 21 日～令和 4 年 3 月 23 日  
**調査面積** 1,110㎡ (1 区:1,083.2㎡、2 区 26.8㎡)  
**発見遺構** 中世以降：柱穴列 1 条、溝状遺構 2 条、土坑 21 基、ピット 9 基  
古墳時代後期～奈良・平安時代：竪穴住居址・竪穴状遺構 32 軒、掘立柱建物址 15 棟、柱穴列 6 条、溝状遺構 21 条、井戸址 5 基、土坑 37 基、ピット 359 基、性格不明遺構 1 基、遺物集中 2 か所  
**出土遺物** 土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、白磁、炆器、土製品、瓦、石器・石製品、金属製品、銭貨、ガラス製品、獣骨、鉄滓など (整理箱 220 箱)

## 1. 遺跡の立地

六ノ域遺跡は神奈川県平塚市の東部に所在し、JR 東海道本線平塚駅の北北東約 3.1km、現海岸からは約 4.5km 内陸に位置しています。調査地は幼稚園跡地で、標高は約 9.7m。周辺には宅地が広がっています。

平塚市の地形は、市域の北・西側に台地と丘陵が連なり、南・東側に沖積低地が広がっています。東端には相模川が南流し、相模湾へ注いでいます。南端の相模湾に面する海岸から、内陸側へ約 6km に渡って、海岸線と並行するように、概ね 12 列の砂州・砂丘列が展開しています。市域には約 300 か所の遺跡が周知されていますが、その多くはこの砂州・砂丘上に立地しています。本調査地点は北側から 3 列目の砂丘の東側にあたり、周辺には奈良・平安時代の遺跡が多数存在しています。

六ノ域遺跡は、これまでに 19 地点の調査が行われています。これまでの発掘調査で、人面や文字が書かれた墨書土器や転用硯、緑釉陶器など国府関連



第 1 図 調査地点位置図 (縮尺 1/25,000)

の遺物が出土しており、遺構では鍛冶工房跡や、当遺跡の北東隅及び東側に隣接する坪ノ内遺跡で、東西に向かい合う大型の掘立柱建物址 2 棟が検出され、国庁東西協殿とされています。

## 2. 調査成果

調査の結果、竪穴住居址や掘立柱建物址、溝状遺構や土坑、井戸など古墳時代後期～奈良・平安時代及び中世にかけての多数の遺構が確認されました。出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁や白磁、炆器、置きカマドや土錘等の土製品、瓦、叩石や砥石等の石器・石製品、鏡、刀子、釘等の金属製品、ガラス玉や獣骨、鉄滓等が遺構内や包含層から出土しています。ここでは、奈良・平安時代の主な遺構と遺物について説明します。

### 竪穴住居址と竪穴状遺構

竪穴住居址及び竪穴状遺構は、合わせて 32 軒確認されました。出土遺物や切り合い関係が無く年代が判別できなかった 3 軒を除くと、年代毎の数は、7 世紀後半～8 世紀前半が 7 軒、8 世紀後半が 1 軒、

9世紀前半が7軒、9世紀後半が10軒、10世紀前半が1軒、10世紀後半～11世紀が3軒でした。7世紀後半～8世紀前半の竪穴住居址は比較的規模が大きく、時代が下るにつれ規模が小さくなります。最も大きいSI20は1辺10m余りで、7世紀末から8世紀前葉の遺物を伴います。覆土から飛鳥時代の畿内産土師器坏の破片が出土しており、中央との関係を窺われます。

#### 掘立柱建物址

掘立柱建物址は15棟確認されました。大半は2間×3間の側柱式の建物ですが、中央西寄りの1棟は2間×2間の側柱式建物です。他遺構との切り合いから、古いものは8世紀中葉以降、新しいものは11世紀頃になると考えています。なお、柱痕を有する柱穴は他にも確認されており、更に多くの建物が存在したと思われれます。

#### 溝状遺構

竪穴住居址等の遺構を区切るように東西方向及び南北方向に複数の溝状遺構が走っています。切り合い関係と出土遺物から、概ね東西方向に走る溝状遺構が古く、南北方向に走る溝状遺構が新しいと考えられます。これらのうち最も規模の大きな東西方向の溝状遺構SD02北側と中央東寄りに集中する南北方向の溝状遺構SD08・12～13の西側で、それぞれ並行して柱穴列が確認されました。

#### 遺物集中

遺物集中は2か所確認されています。一つは1区中央北側B・C-3グリッドに位置するSU01で、鬼高式の土師器坏及び甕の破片が集中して出土しました。須恵器も平瓶が1点の他坏や甕の破片が数点出土しています。もう1か所は中央東寄り南北に走る溝状遺構5条のうち中央を走るSD11の上層で遺物集中が検出されました。こちらは須恵器の甕や壺、灰釉陶器の壺や瓶類を中心とした大量の遺物が出土しました。出土遺物は概ね8世紀後半～9世紀代にかけてのもので、9世紀末～10世紀前半頃に投棄されたと推定されます。

#### 墨書土器・刻書土器

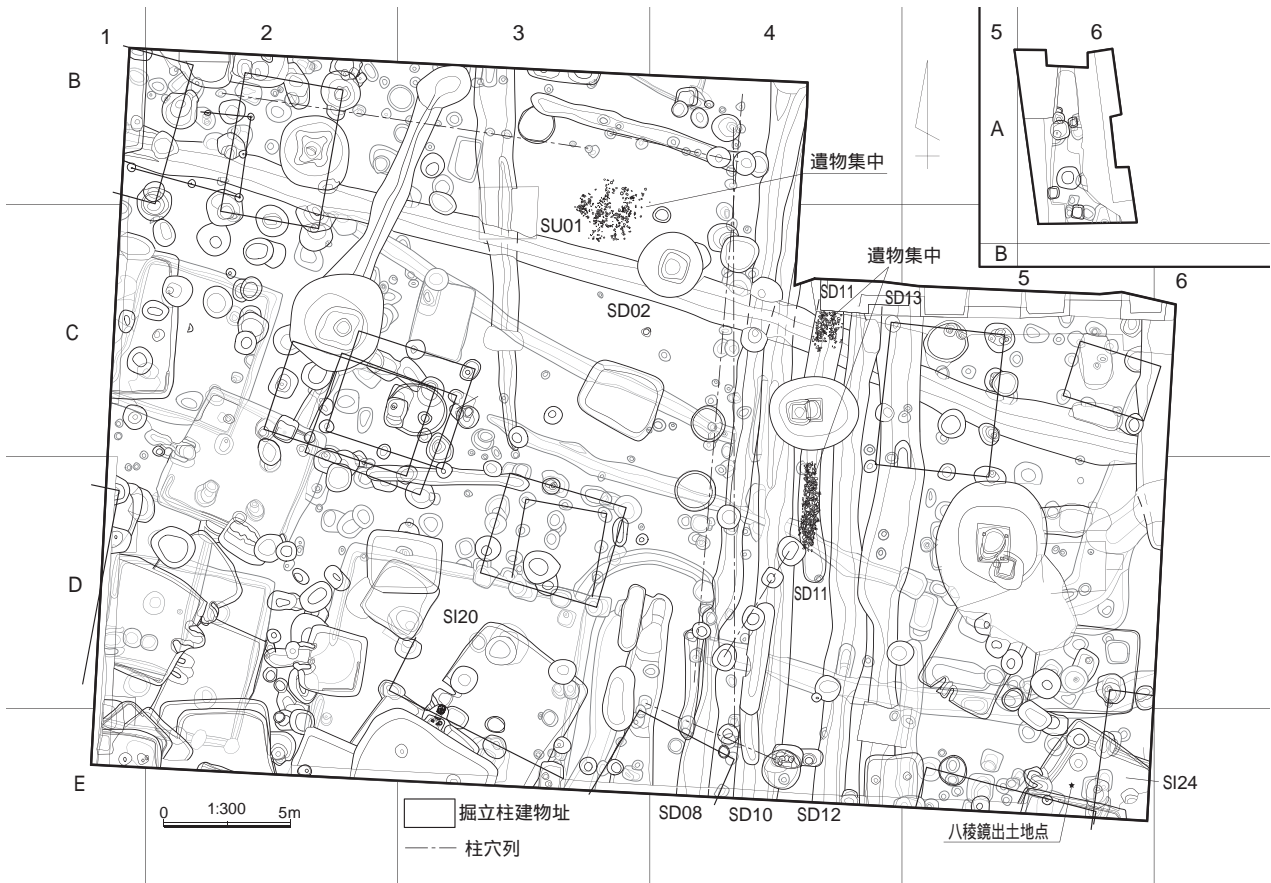
本調査では、墨書土器が20点、刻書土器が2点確認されています。墨書土器は「ラ？」が8点、「守」が4点、他に「蔵」、「太」、「正」、「肴？」、「向」、等の文字が書かれた土師器や須恵器の坏や皿が主に9世紀頃の遺構や包含層から出土しています。刻書では「□戌」、「全」が須恵器甕及び坏に刻まれています。

#### 八稜鏡の出土

この他に特筆すべき遺物として八稜鏡が挙げられます。中世面の調査終了後、調査区南東側で奈良・平安時代の包含層掘削中に八稜鏡が出土しました。当鏡は界圏線内に草花と2羽の鳥の文様を有するもので、唐の鏡を模倣した瑞花双鳥文八稜鏡です。出土を確認した時には掘削道具に当たって移動していましたが、地面に残存した痕跡から、鏡面を上にして埋まっていたと推測されます。周辺を精査しましたが、掘り込み等は検出できませんでした。包含層をさらに掘り下げたところで、竪穴住居址SI24が検出されています。カマド掘り方から10世紀後半～11世紀前半頃の土師器坏が出土していることから、当址は少なくとも10世紀後半以降に築造されたと考えられます。八稜鏡の出土地点は床面から約30cm上層であり、当址が廃棄され、竪穴が埋没する過程で、八稜鏡が埋まったと推定されます。

#### 3. まとめ

今回の調査では、7世紀末～11世紀にかけての竪穴住居址、掘立柱建物址を中心とした多数の遺構が確認されました。竪穴住居址及び竪穴状遺構の数は8世紀後半に減少し、9世紀になると増加に転じ、10世紀に再び減少します。掘立柱建物址も含め、建物数の推移は周辺での過去の調査でも同様な傾向を示しており、国府の造営と運営や律令体制下での社会情勢の変動に対応する人口の増減と捉えられています。そういった社会の変動の中で、地区境と考えられる溝状遺構と柱穴列や2か所の遺物集中などの遺構、また、墨書土器や八稜鏡などの出土遺物の位置づけを検討して行きたいと考えています。



第 2 図 奈良・平安時代 1 面・2 面重ね図



写真 1 調査区全景 奈良・平安時代 1 面 (北から)



写真2 調査区全景 奈良・平安時代2面(北から)



写真3 遺物集中SU01(南から)



写真4・5 遺物集中SD11上層北側(左)南側(右)(南から)



写真6 墨書土器



写真7 瑞花双鳥文八稜鏡



# 諏訪前 B 遺跡第 8 地点

吉岡 秀範

株式会社アーク・フィールドワークシステム

- 所在地** 平塚市四之宮二丁目 23 番
- 調査機関** (株)アーク・フィールドワークシステム
- 調査担当** 吉岡秀範
- 調査期間** 令和 3 年 5 月 17 日～令和 3 年 9 月 6 日
- 調査面積** 約 739.9m<sup>2</sup>
- 発見遺構** 竪穴住居跡・竪穴状遺構 50 軒、掘立柱建物跡 3 棟、土坑 193 基、溝状遺構 8 条、道路状遺構 1 条、埋設土器 1 基、ピット 112 基 (古墳時代後期～平安時代)
- 出土遺物** 石器 (石鏃) (縄文時代)、土器 (土師器・須恵器・ロクロ土師器)、灰釉陶器、緑釉陶器、土製品 (置きカマド・土錘・瓦など)、鉄製品 (刀子・釘など)、銅製品 (丸靱・半球形製品)、石製品 (砥石・紡錘車)、軽石・鉄滓 (古墳時代後期～平安時代)



第 1 図 調査地点位置図 (縮尺 1/25,000)

## 1. 遺跡の立地

本地点は、JR 東海道本線平塚駅の北約 2.8km に位置し、周辺には商業店舗・集合住宅・畑地等が混在した地域で、地形的には、南東部の市街地周辺に広がる砂州・砂丘地域では約 12 列が確認されており、本地点はその砂丘列第 3 列の砂丘が広がる砂丘間微高地付近に所在しています。

本遺跡ではこれまでに集合住宅・遊戯施設等の建設に伴い 7 地点で調査が行われ、その調査では古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、井戸等が非常に密に分布することが確認されている地域です。また、本地点の南側には古代の推定東海道が東西に通っているのではないかと推測されており、本調査でその一部が確認されるのではないかと想像されていました。なお、本地点の調査は 3 か所に分かれることからそれぞれを A～C 区と呼称して調査を実施しました。

## 2. 調査成果

### 古墳時代後期～平安時代

竪穴住居跡・竪穴状遺構は、A 地区で 14 軒、B 区で 21 軒、C 区で 15 軒の計 50 軒確認され、出土遺物から奈良～平安時代頃 (8 世紀～10 世紀頃) の所産と考えられます。各区ともに一部の範囲に複雑に重複する傾向が認められるほか、調査区外に延びるもの、後世の削平を受けているものが多く、規模・形状が明瞭にできたものはほとんどない状況でした。確認された多くの竪穴住居跡等はおおむね南～北方向に壁を合わせていますが、壁の方向が大きく異なるものも 3 軒 (B 区: SI27、A 区: SI35、C 区: SI52) 確認されました。カマドは北・東・西壁で認められ、白色粘土を用い、補強材として四角柱状に成型されたいわゆる切ロームや土師器甕を用いて構築されていました。C 区 30 号竪穴住居跡 (SI30) の西壁で確認されたカマドでは支脚と考えられる棒状土製品と土師器甕の底部付近を 5 重に重ねて柱状にしたものが横並びで確認されました。

掘立柱建物跡は、B 区で 1 棟、C 区で 2 棟の計 3

棟が確認されました。B区で確認された1号掘立柱建物跡(SB01)は南北棟で、柱の覆土が周辺の遺構の覆土より黒味の強い黒褐色土であることから桁行3間以上×梁行2間以上のものと推測されます。C区で確認された2号掘立柱建物跡(SB01)は東西棟で、桁行3間×梁行2間の柱穴の間に溝を持つものでした。3号掘立柱建物跡(SB03)は確認された部分が建物跡の北西部分と考えられる柱穴3個であり規模等は明らかではありませんが、柱穴の間隔から南北棟と推測されます。

土坑は各区で確認され、総数193基が認められました。重複が激しいことから形状・規模が明瞭ではありませんが、平面形は円形・楕円形のもの为主体を占めるものと考えられます。

溝状遺構は、A・C区で東西溝を各1条、B区で東西溝1条、南北溝5条の6条が認められました。B区北側で認められた南北溝3条(SD01・02・04)は、道路状遺構の硬化面下から認められ、その他の重複する遺構のほぼすべてを切っていました。SD04は北側調査範囲の中央付近から西側にかけて緩い弧を描くように西側調査区外に、SD02は直線的に北側調査区に伸びていました。

道路状遺構(SF01)は、B区を南北に通っており、南・北側は調査区外に伸び、中央付近の攪乱により南北に分断される状況で確認されました。確認全長は40.08mで、主軸方向はN-1°-Eでほぼ座標上のグリッドに沿って伸びていました。確認された道路の状況は南側と北側では大きく異なり、南側では中央付近が溝状に硬化面が認められない部分がありますが、確認幅3.16～3.34mの褐色で非常に硬い硬化面(第1面)と、その上部に2面(第2・3面)の硬化面が確認されました。第1面では硬化面の中央付近に南北に並行して伸びる4条の溝状の窪みが認められ、それら4条は幅の広い2条(上幅24～96cm、下幅6～16cm)と、やや幅の狭い2条(上幅12～32cm、下幅6～10cm)の2対に分かれ、幅の広い2条の間隔は1.1～1.25m、幅の狭い2条の間隔は1.05mで、2対の溝状の窪み

はほぼ同一幅と考えられ、轍痕ではないかと推測されます。第2面と考えられる痕跡は硬化面西側で認められた溝の上部に帯状に非常に硬く締まった硬化面で、その硬化面内にはバラス状に土師器・須恵器の細片が多数含まれていました。第3面は調査区南西端の土層断面で確認されたもので、平面としては確認できませんでした。

北側の道路部分は、南側で確認された硬化面の延長線上で確認されましたが、硬化面は南側のように面として広がった褐色の非常に硬い硬化面ではなく、点在するように硬化範囲が広がるものでした。これは南側に比べ北側が遺構の重複が激しく基盤の状況が異なっていたことが要因とも考えられます。点在する硬化面の範囲は、幅4.2～4.8mと南側の硬化面の幅よりやや広いもので、複数の硬化面は認められませんでした。なお、南・北側の硬化面の両端には側溝状の溝は認められませんでした。

埋設土器(SZ01)は、B区のB4グリッドで確認されました。土器は確認規模0.47×0.39mの円形で、深さ23cmの掘り込みに直立(正位置)した状態で埋設されていました。調査時点では土器内に含まれていた土を除去せずに取り上げを行い、改めて土器内を精査した結果、土器内からは骨片は検出されませんでした。土器上部に当たる付近から完形の土師器坏が口を合わせた状態で認められました。なお土師器坏内には土が確認されたのみで、骨片等は確認されませんでした。

### 3.まとめ

本地点の調査では、A～C区では竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・埋設土器・ピットが非常に複雑に重複して確認され、B区ではほぼ南-北方向に伸びる道路状遺構を確認しました。

竪穴住居跡・竪穴状遺構は、各調査区で複雑に重複し他の遺構との重複が認められないものはありませんでした。隣接して存在する第4調査地点では単独で存在する箇所も認められるものもありました

が、本地点と同様に複雑に重複しており、本地区周辺は竪穴住居跡等が密に存在する地域であると推測されます。

今回の調査では古代東海道に関しては、その痕跡を確認することはできませんでしたが、その枝道と推測される道路がB区で確認された道路状遺構(SF01)と考えられます。本地点で確認された道路状遺構は、側溝は認められなかったものの、確認された硬化面の幅は3.16～4.8mで、一部ではありますが3面の硬化面が確認されたほか、硬化面では轍痕と考えられる窪み状の南北方向の溝が2対(4条)確認されており、主要道路(東海道)の枝道として

頻繁に使用されていた道路ではないかと推測されます。本道路の時期は、本跡が多く遺構と重複し、それらの大半を切っていることや、第2面の硬化面内に敷き均されたように含まれている土器の小片の詳細な時期を検討する必要がありますが、集落内でも比較的新しい時期のものであると推測されます。

埋設土器は、土器内から骨片は確認されなかったが、土師器坏2点が口を合わせた状態で納められていたことから、埋葬に関連するものと推測されます。



第2図 遺構配置図(1/400)



写真1 調査区全景（北側上空から）



写真2 14号住居址跡遺物出土状況（北から）



写真3 B区調査区南側道路状遺構全景（北から）



写真4 30号竪穴住居跡カマド全景（西から）



写真5 B区埋設土器出土状況（南から）

# 道半地遺跡第9地点

大坪 宣雄

有限会社吾妻考古学研究所

**所在地** 平塚市田村一丁目 5669 番 1 外 2 筆  
**調査機関** 有限会社 吾妻考古学研究所  
**調査担当** 大坪宣雄  
**調査期間** 令和 3 年 12 月 20 日～令和 4 年 2 月 21 日  
**調査面積** 973m<sup>2</sup>  
**発見遺構** 溝状遺構 2 条 (古墳時代)、竪穴状遺構 1 軒、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 3 基 (奈良・平安時代)、竪穴状遺構 3 基、溝状遺構 6 条、井戸跡 12 基、大型土坑 2 基、土坑 16 基、ピット 264 基 (中世)  
**出土遺物** 土師器・須恵器 (古墳時代)、土師器・須恵器・灰釉陶器 (奈良・平安時代)、かわらけ・炆器・白磁・青磁・鉄製品・銭貨 (中世)



第 1 図 調査地点位置図 (縮尺 1/25,000)

## 1. 遺跡の立地と遺跡の概要

平塚市の相模湾に面する平塚低地は、12 列に及ぶ砂州・砂丘列が確認されている。道半地遺跡は、砂州・砂丘地帯最北の第 1 列東端から相模川右岸の自然堤防上にかけて所在する。今回の調査地点は、相模川右岸の自然堤防上に位置し、平坦な地形上にあり、砂丘列、又は砂州の一部が確認されている。道半地遺跡は、過去に 8 度の調査が行われている。古墳時代から中世にかけての住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝状遺構・土坑等が検出されている。

本調査地点の南に位置する第 4 地点では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡等に加え、丁寧に構築された井戸跡が検出されている。

## 2. 調査成果

今回の調査は、店舗新築工事予定地内約 973m<sup>2</sup>を調査範囲として発掘調査を行った。主要部分の 930m<sup>2</sup>を I 区、43m<sup>2</sup>の小規模調査区を II 区とした。

I 区では建物解体時の攪乱によって調査区の西側

を中心に遺構確認面まで攪乱を受けており、西側では遺構の検出数は少ないのが確認されている。

### 古墳時代

調査区中央南側で検出された SD05 は、形態が弧状を呈することや覆土に赤褐色火山灰粒子が含まれる特徴や、近隣で検出された SE07 から出土した古墳時代後期須恵器坏蓋の存在からみて、円墳周溝の可能性が高いと思われる。残存部分から推測した円墳の大きさは、墳丘径約 16.0m、周溝外縁で約 18.8m を測る。残念ながら、南側で行われた第 4 地点では調査が行われておらず、これ以上の検証はできない状況にある。SD04 は、皿状の浅い断面を呈し、直線的に南北方向に構築されている溝である。

### 奈良・平安時代

調査区中央東側で検出された土坑群及びピット群の内、掘立柱建物跡を構成する 1 棟は奈良・平安時代の比較的大形破片の土師器坏・甕などの遺物が出土することから、奈良・平安時代に属するものと考えられる。2 間×3 間の大きさで、桁行き 5.61m、

梁行き 4.22m を測る。

## 中世

竪穴状遺構は、いずれもやや不整な楕円形を呈する遺構で、掘り込みは浅い。底面にはピットがみられるが、上屋を推測するような配列は確認できない。

井戸跡のうち上面がロート状を呈する大型のものが4基ある (SE01・02・05・08)。筒状を呈する井戸跡は8基 (SE03・04・06・07・09～12) あり、底面までの深さは1m～3m以上と様々である。井戸跡からは土師器細片、中世の常滑窯の甕片、かわらけ細片、中国製青磁・白磁細片等が確認された。

調査区西側で検出されたSD06は、直線的に南北方向に構築されている。調査区東側で検出されたSD01も、SD06と同様な形状を呈し、同じく直線的に南北方向に、SD02は、南西～北東方向へと直線的に、SD03は直線的に南北方向にそれぞれ構築されている。

大型土坑は、井戸跡や竪穴状遺構に類似する覆土

を呈している。浅い掘り込みの遺構で、遺構の用途については不明である。

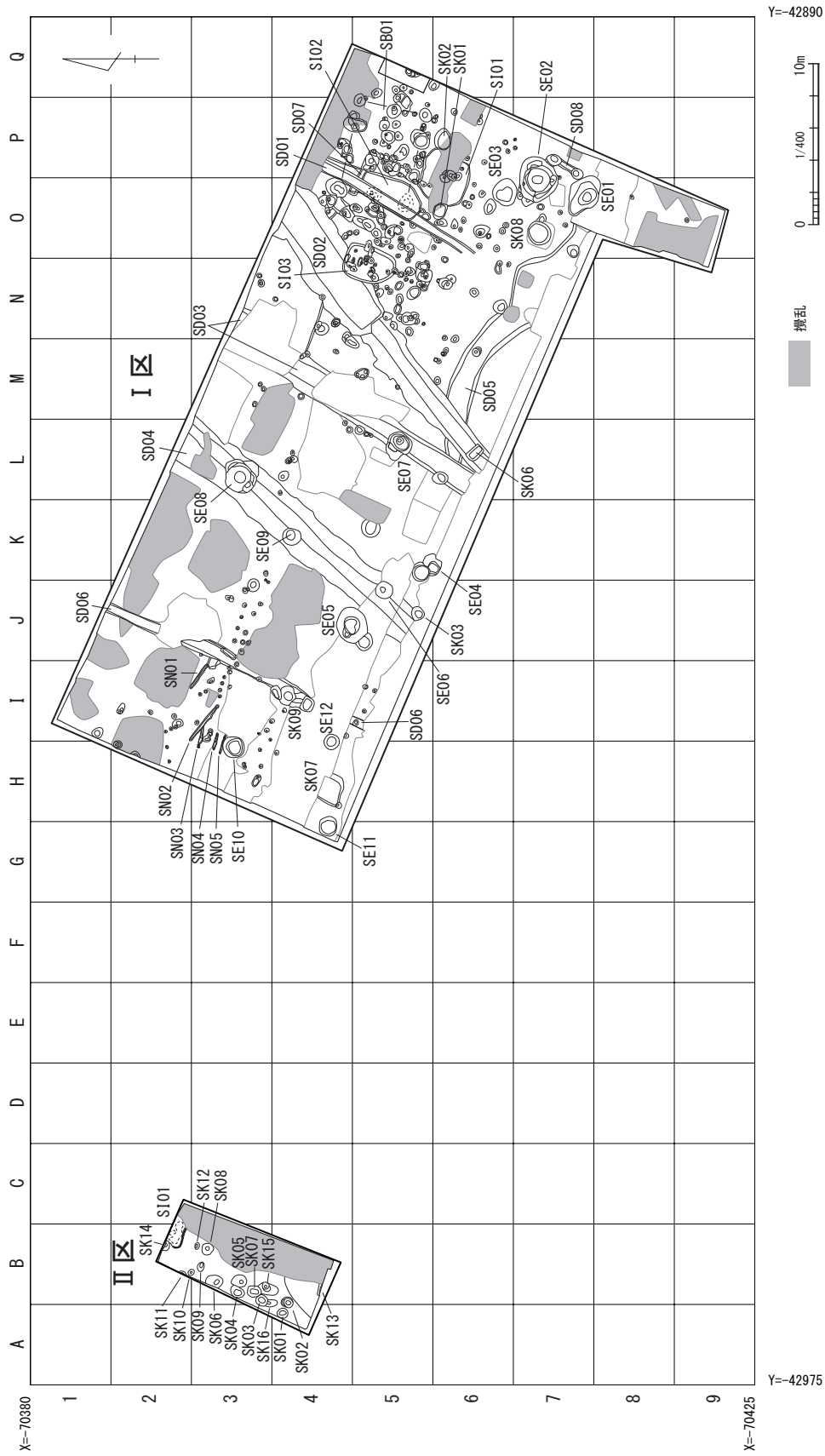
## 3. まとめ

今回の調査では、I区南側の第4地点の調査で検出されている奈良・平安時代の住居跡は検出されず、古墳時代から中世期にかけての井戸跡、竪穴状遺構、溝状遺構、大型土坑、土坑、ピット群の検出に留まった。SD05はその形状や覆土の様相からみて古墳時代の円墳の可能性が考えられ、SD04は覆土に含まれる特徴的な火山灰粒子の様相からみて古墳時代に属する可能性が考えられる。調査区東側で検出された土坑やピット群は掘立柱建物跡を構成するものと考えられ、掘立柱建物跡は1棟以上が重複しているものと思われる。

本調査区は、各時代を通じて遺構の密集度や遺物の稀薄な様相からみて、集落の中心から外れた周縁部に位置する遺跡として位置づけされよう。



写真1 調査区全景 (南から)



第2図 遺構配置図(縮尺 1/400)

# 構之内遺跡第7地点

中村 哲也

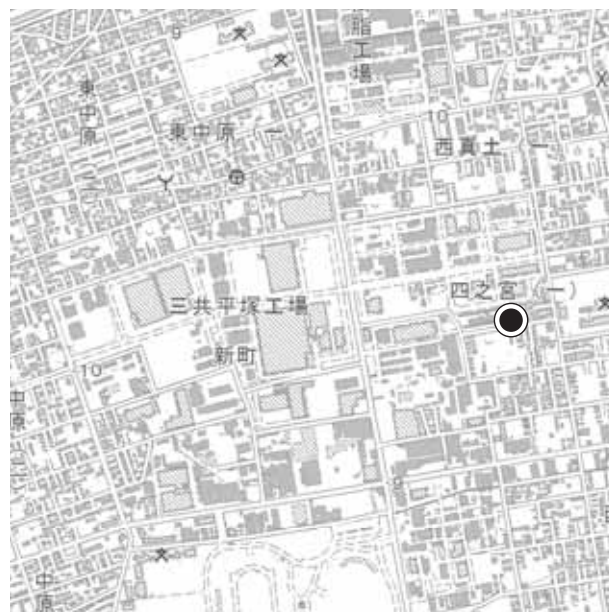
株式会社玉川文化財研究所

**所在地** 平塚市四之宮一丁目173番の1外  
**調査機関** 株式会社 玉川文化財研究所  
**調査担当** 中村哲也  
**調査面積** 1,919㎡  
**調査期間** 令和3年7月12日～令和4年1月31日  
**発見遺構** 奈良・平安時代：溝状遺構、井戸址、土坑、ピット  
中・近世：溝状遺構、土坑列、土坑  
近代：溝状遺構、土坑  
**出土遺物** 縄文時代：土器  
古墳時代：土師器、須恵器  
奈良・平安時代：土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、石製品、獣骨  
中・近世：陶器、磁器、土器、瓦、土製品、石製品、銭貨、獣骨  
近代：陶器、磁器、ガラス製品、銭貨、焼夷弾

## 1. 遺跡の立地

構之内遺跡（No.214遺跡）は、県内有数の古代遺跡包蔵地である相模国府域推定範囲の西端部に該当します。構之内遺跡内では本地点を含めて8カ所の本格調査が行われており、古代を主体とする集落遺跡であることが明らかになっています。地形的には、平塚市南部に広く展開する湘南砂丘上に立地し、遺跡範囲北側は第3砂丘列、中央は砂丘間凹地、南側は第4砂丘列に該当します。

今回の調査地点は遺跡範囲の中央南寄りに位置し、地形的には砂丘間凹地～第4砂丘列北側緩斜面に該当します。現相模川の右岸からは西方約2.2km、相模湾の海岸線からは北方約4.0kmの距離にあります。標高は現地表面で約9.1mを測ります。



第1図 構之内遺跡の位置（縮尺1/25,000）

## 2. 調査成果

発見された遺構の内訳は、奈良・平安時代の溝状遺構192条、井戸址10基、土坑8基、ピット167基、中世～近世の溝状遺構16条、土坑列2列、土坑6基、近代の溝状遺構1条、土坑2基などです。

出土遺物の総量は中テン箱で約23箱分を数えます。時期的には縄文時代、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世、近世、近代にわたりますが、主体をなすものは9世紀代に属する土器群と近代遺物群です。以下に主要な調査成果について時代ごとに述べます。

### 縄文時代

土器2点が出土しましたが、遺構は発見されませんでした。内訳は中期後葉土器の把手部破片1点と後期前葉土器の口縁部破片1点です。本地点至近における当該期的活動の傍証となる可能性があります。

### 古墳時代

後期に属する土師器杯3点、須恵器杯1点が出



土しましたが、遺構は発見されませんでした。

#### 奈良・平安時代

発見された遺構の内訳は、溝状遺構 192 条、井戸址 10 基、土坑 8 基、ピット 167 基です。当該期遺物の総量は中テン箱で約 9 箱分を数え、内容的には土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、石製品、獣骨などがみられます。古代遺構群の分布傾向は、南地区と北地区で大きく異なります。

緩斜面に該当する南地区では、地区全域にわたって小規模な南北方向溝群が分布し、それらを切るように東西方向の大規模溝群が展開しています。各溝の規模・形態・位置関係などから、南北方向の小規模溝群は畝状遺構などを構成する溝、東西方向の溝群は土地区画に関連する溝と推定されます。また、とくに規模が大きい H1・2・3 号溝は、斜面地と砂丘間凹地の地形境界に配された溝の可能性も考えられます。

その他の遺構の分布状況は、地区東側では井戸群、土坑群、ピット群などが密集して展開していますが、地区西側では主に井戸群、地区中央では主にピット群が偏在しています。

砂丘間凹地に該当する北地区では、低地の区画を主目的としたものと推定される多数の溝状遺構が展開しています。溝を方向別にみると、南北方向 62 条、東西方向 32 条、L 字状 2 条、コの字状 1 条で、方位については、南北方向は N - 5 ~ 15° - W 前後、東西方向は N - 75 ~ 85° - E 前後を示します。このうちコの字状を呈する H124 号溝などは、区画単位を推定する手掛かりとなる可能性もあります。

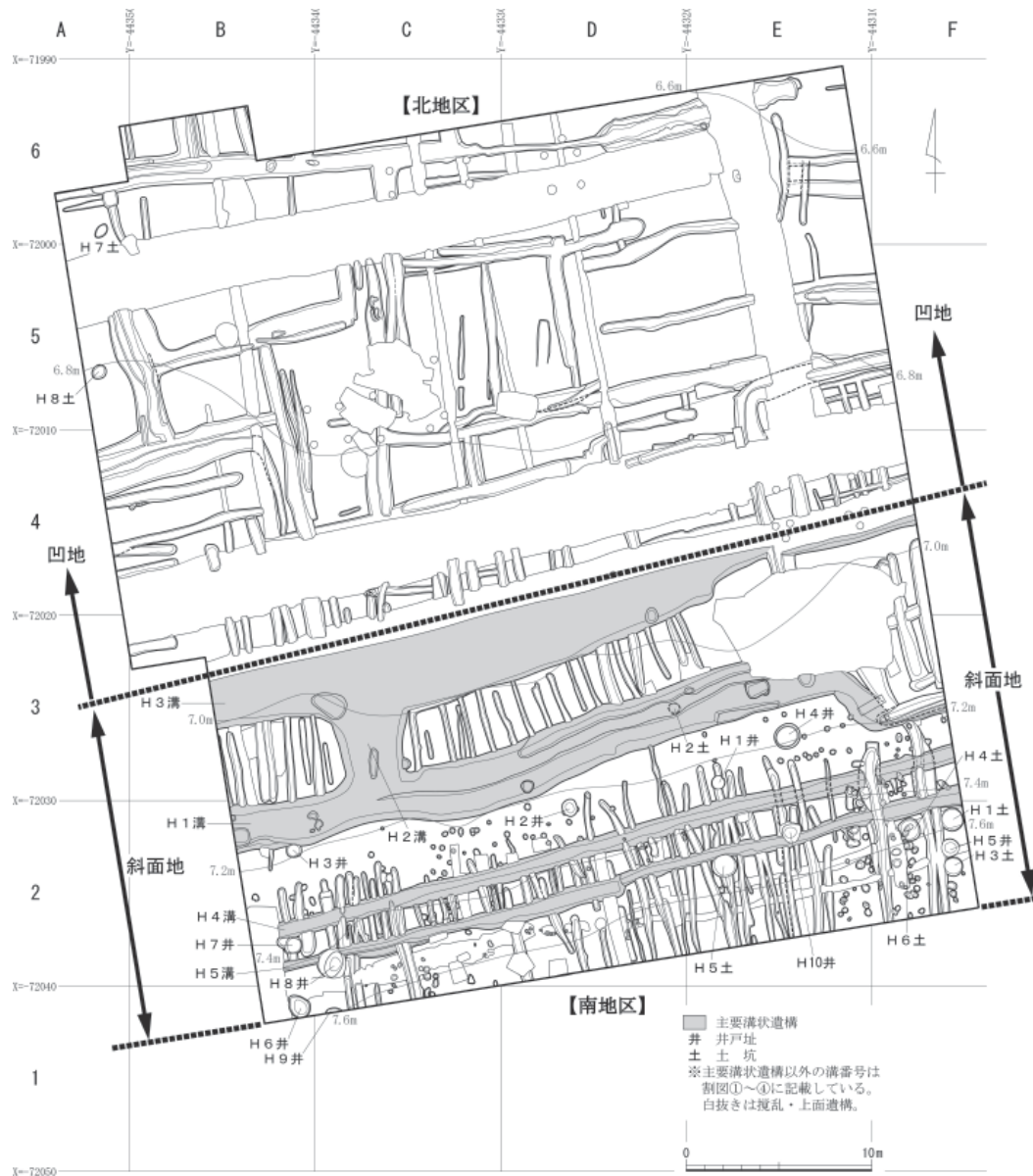
自然遺物としては、H3 号溝でウマ四肢骨、H4 号溝で集中分布する複数点のウマ歯、H5 号溝でウマ上下歯列、H150 号溝でウシ上下歯列が出土しました。いずれも何らかの儀礼行為（ウマ・ウシを贅とする雨乞い祭祀など）に起因する可能性が考えられます。

#### 中世～近世

本時期の遺構は溝状遺構を主体とします。これらは N - 10 ~ 15° - W 前後を指示する南北方向溝群と、N - 75 ~ 80° - E 前後を指示する東西方向溝群に大きく二分されます。いずれも区画を意図した溝と推定され、とくに砂丘間凹地では東西溝と南北溝が整然と配されています。また、一部の溝と土



第 2 図 構之内遺跡第 7 地点調査区位置図 (縮尺 1/3,000)



第3図 奈良・平安時代遺構分布図(縮尺 1/400)

坑列では宝永火山灰の堆積が確認されました。

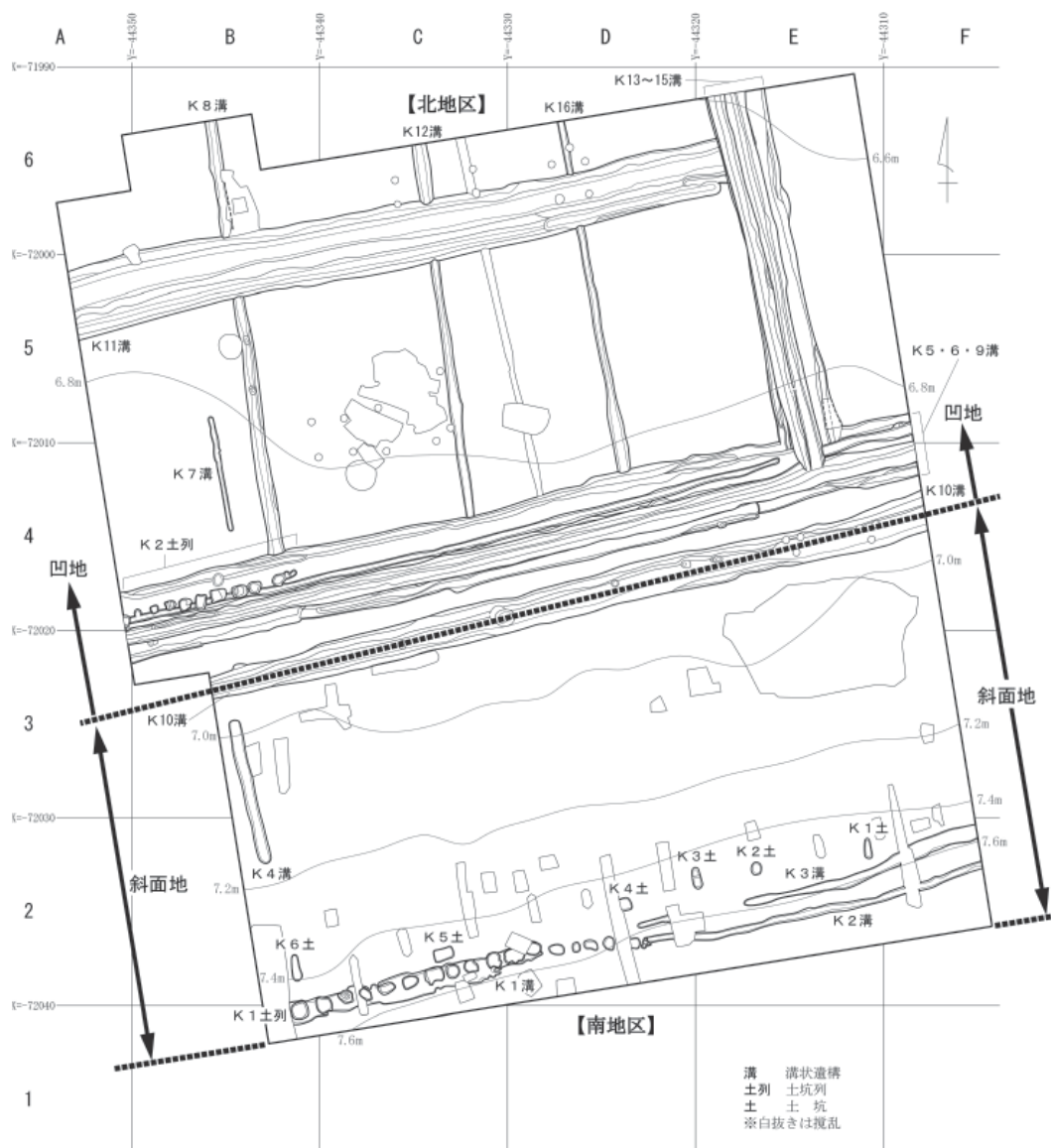
近代

近代の調査では、1945(昭和20)年7月16日～7月17日の平塚空襲との関連が想定される遺構と遺物が発見されました。

KD1号溝状遺構は平塚空襲後の瓦礫除却を目的とした溝と推定されます。本址では近代に属する陶磁器類、ガラス製品などと近世の瓦が出土しており、平塚空襲の際に本遺跡周辺で近世の瓦葺建物が被災した可能性を示す資料と考えられます。

KD1・2号土坑では、それぞれ弾頭信管と多数の焼夷弾破片が出土しました。分析の結果、これらは油脂焼夷爆弾(ナパーム弾)に分類されるM47A2型100ポンド焼夷弾の弾頭信管と弾体～弾尾部破片に同定されました。

また、遺構外からは22点のM50型テルミットマグネシウム焼夷弾が出土しました。分析の結果、18点はM50A2型(通常焼夷弾)、2点はM50X-A3型(遅延爆発型焼夷弾)に同定されましたが、2点は細分不可能でした。



第4図 中世～近世遺構分布図(1/400)

出土焼夷弾の内容を整理すると、総点数は24点(M47A2型2点、M50A2型18点、M50X-A3型2点、M50型細分不明2点)で、調査範囲(1,919㎡)における被弾密度は、単純計算で80.0㎡弱(≒約9m四方)につき1発となります。これらは平塚空襲において高密度な爆撃が行われた状況を示す資料と考えられます。

### 3. まとめ

近年の調査成果の蓄積により、構之内遺跡を包括

する平塚市域の第3～第4砂丘列における古代遺跡の基本構造が徐々に明らかになりつつあります。各遺跡に共通する大まかな遺構分布の傾向は、砂丘上には居住域、緩斜面～低地域には生産域が展開している状況が看取されます。今回の調査においても、同様の遺構分布状況を確認することが出来ました。また、近代の調査では複数種類の焼夷弾が発見されました。平塚空襲の被災状況を端的に示す資料として特筆されます。



写真1 遺跡近景（西から）



写真2 南地区の古代溝状遺構群（東から）



写真3 古代溝状遺構で出土した土師器坏



写真4 古代溝状遺構で出土したウシ頭骨



写真5 古代溝底面で出土した M50 型焼夷弾

## 田村館跡第6地点

吉岡 秀範

株式会社アーク・フィールドワークシステム

所在地	平塚市田村7丁目6189番6
調査機関	(株)アーク・フィールドワークシステム
調査担当	吉岡秀範
調査期間	令和3年11月15日～令和4年2月2日
調査面積	192.2㎡
発見遺構	土坑21基、溝状遺構4条、井戸1基、ピット7基（奈良・平安時代～中世）、土坑1基、溝状遺構1条（近世以降）
出土遺物	土師器・須恵器・土製品（土錘・瓦）（奈良・平安時代）、土器（伊勢系鍋）・かわらけ・陶器・青磁・木製品（下駄）・石製品（中世）、陶器・磁器（近世以降）



第1図 調査地点位置図（縮尺1/25,000）

### 1. 遺跡の立地

田村館跡第6地点は、平塚市の東部に位置し、JR東海道線平塚駅の北側約5.6kmに所在し、西側約400mに国道129号線が南北に通っています。また東側約300mには相模川が南流し、相模川に架かる神川橋の南西約400mに所在します。本地点は平塚市の南東部の市街地に広がる砂丘域の東側で、相模川によって形成された自然堤防上に立地しています。調査区の地表面の標高は9.40m前後でした。

本跡はこれまでに5地点で調査が実施されており、宮ノ前遺跡の名称で実施された第1・2地点では近世と考えられる木製櫃状遺構等が確認され、同時期の陶磁器・石臼等が出土しましたが、中世とみられる遺構は確認されませんでした。第3地点では弥生時代中期頃の土坑と、中世・近世の土坑・溝状遺構・井戸等が確認され、中世の田村館に関連するとも考えられる溝状遺構も含まれますが、その大半は近世の田村宿に関連する遺構と推測されています。第4地点では5条の溝状遺構が確認されましたが、遺物が出土しなかったことから、時期の限定

が難しくそれらは中世・近世の遺構として捉えられています。第5地点では中世頃のピット等が確認されていますが建物跡を構成するものとは想定されませんでした。

### 2. 調査成果

#### 平安時代～中世

SD01（溝状遺構？）は、東側・南側調査区外に延びていましたが、西側は西側調査区の西端付近で立ち上がっていました。確認できた長さは16.5mで、明瞭な幅は確認できませんでしたが、西端の立ち上がり付近で約5.4m、中央付近では宝永スコリア（1707年富士山の噴火による降灰層）の堆積状況から東側調査区では幅10mを超えるものと推測されます。深さは底面が確認された西端付近では確認面で0.9m、調査区壁の土層断面では1.8m、底面は確認されませんでした。東壁付近で確認できた深さは確認面で2.5m、調査区壁の土層断面で3.3mです。底面は確認された西側ではほぼ平らで、

中央付近で70cmの段差があり東側が深くなっている、東側に向かってさらに深くなっているものと推測されます。西側の北側の壁傾斜部分には掘り込みの深いピットが認められたことから何らかの施設が存在したとも考えられます。主軸方向は北側壁でN-87°-Wです。

遺物は、かわらけ、木製品（下駄・板材）等が出土しました。時期は宝永スコリア層の下層から出土したかわらけから15世紀後半～16世紀初め頃と考えられます。

SD02（溝状遺構）は、東西に延びる溝状遺構で東・西側調査区外に延びていました。確認された長さは17.8m、幅は確認面で1.36～1.6m、調査区壁の土層断面では東壁で2.36m、西壁で2.53m、深さは確認面で東側では1.4～1.52m、西側では0.65～1.25m、調査区壁の土層断面では東壁で1.94m、西壁で1.44m、やや西側が浅くなる傾向がみられます。壁は底面から中程までほぼ垂直で、中程から上部は八字状に大きく開いて立ち上がっていました。底面は幅0.42～0.84mで、東側はほぼ平らですが、西側は長さ1.3cm、底面からの高さ51cm、確認面からの深さ47cmの土橋状の掘り残し（高まり）が認められ、東側には階段状に底面からの高さ29cmの小段が1段認められました。主軸方向は、N-78°-Wです。

遺物は覆土中から土師器・須恵器・かわらけ・青磁片が出土しました。時期はかわらけ・青磁から13世紀中頃～後半頃と考えられます。

SD04（溝状遺構）は西側調査区で確認されたもので、東側はSD01に切られており、西側は調査区外に延びていました。確認された長さは4.0mで、幅は西壁で4.98m、深さは確認面で1.44m、調査区壁の土層断面で2.1mです。西側の延長部分に関しては市教育委員会が本調査区の西側で実施した試掘調査で確認した溝状遺構に繋がるものと推測されます。

遺物は底面付近の覆土中からかわらけ等が出土し、時期はかわらけ等からSD01とほぼ変わらない

時期と推測されます。

井戸（SE01）は西側調査区東壁際で確認され、SD02に切られ調査区外に延びていました。平面形は楕円形状で、底面は、遺構確認面から2m程掘り下げましたが確認できませんでした。覆土中には灰褐色粘土を多量に含んでいることから意図的に埋め戻されたものと考えられます。

遺物は土師器等が出土し、ほかの遺構との重複関係から平安時代頃のものと考えられます。

土坑は、調査区北側のSD02付近で多くが認められました。平面形は円形、楕円形状のものです。

ピットは、土坑と同様にSD02周辺で大半が認められましたが、それらに規則性が認められなかったことから、建物跡を構成するものとは考えられませんでした。

### 近世以降

SD03（溝状遺構）は調査区中央付近を南北に延びるもので、北側は調査区際で西に方向を変え調査区外に延びていました。SD01・02・05と重複し切っていました。断面形は逆台形状で、覆土はブロック状の褐色土が多く含まれ、締りがないので、底面付近の覆土は鉄錆分を含む粘性の強いものでした。

遺物は覆土中よりかわらけ、近世以降の磁器（土瓶）が出土し、時期は出土した磁器の土瓶から近代のものと考えられます。

### 3.まとめ

本跡は、鎌倉幕府の重臣である三浦（義村）氏の居館である田村館（田村山荘）の推定地で、事前の市教育委員会の試掘調査で溝状遺構が確認されたことから、館跡に関連する堀の存在が推測されました。

本地点の調査の結果、13世紀中頃～後半の溝状遺構（SD02）のほか、15世紀後半頃の非常に幅の広い溝状遺構（SD01）と、それに切られた溝状遺構（SD04）等多くの遺構が確認されました。

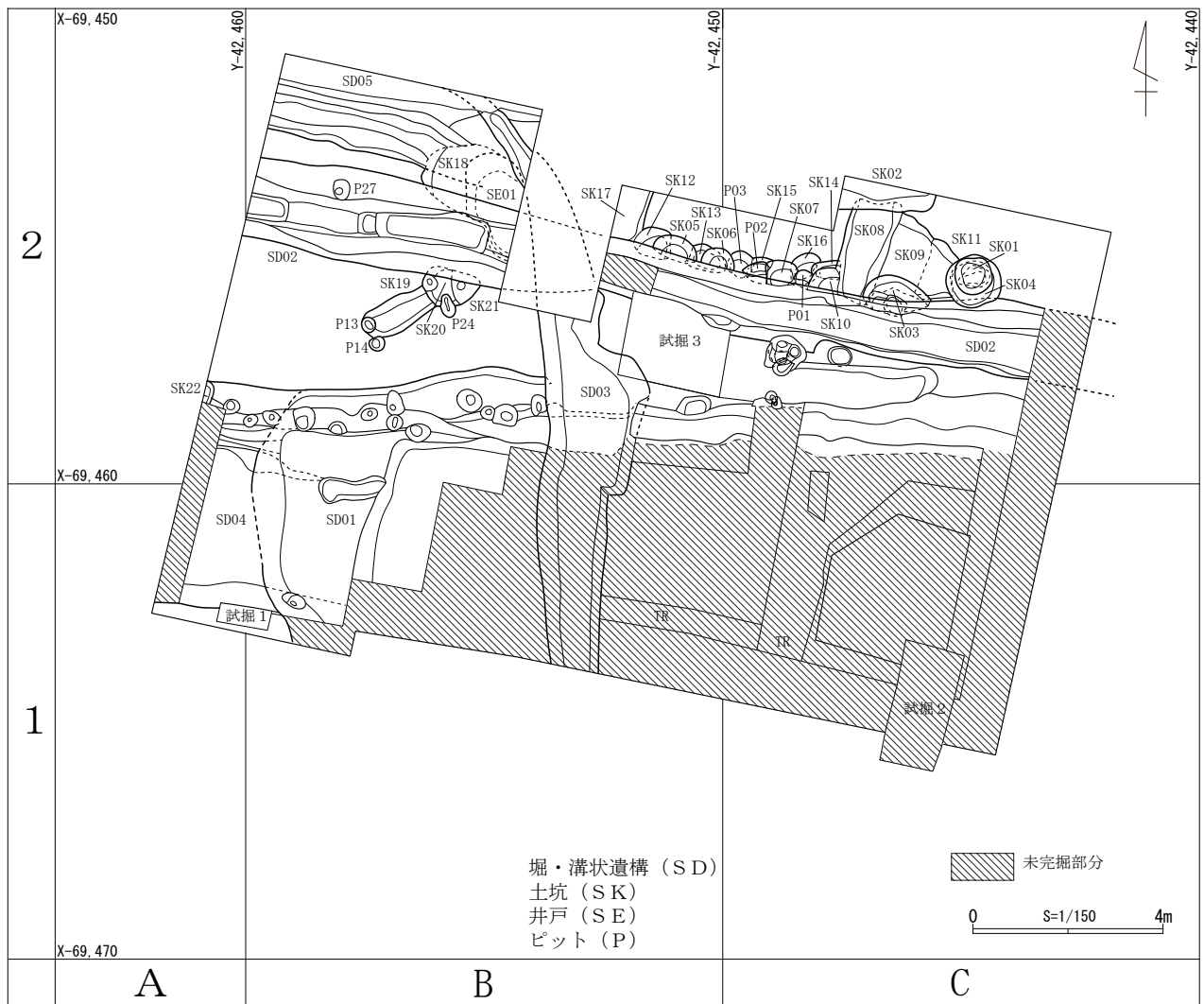
SD02は直線的に東西に延びる溝状遺構で、調査区壁の土層断面では溝幅が2mを超え、深さ1.4～1.9mと明瞭な掘り込みで、更に東・西側に延びる

ことが推測され、出土した遺物から13世紀中頃～後半頃のもので、田村館と類似する時期の所産であることから、本遺構は田村館の南側を区画する溝(堀)の一部ではないかと推測されます。

SD02と並行するように掘り込まれているSD01・04は、出土遺物から15世紀後半頃と考えられ、田村館とはやや時期が異なり、掘り込みの全容は明らかではありませんが、幅は10m、深さも3mを超える大規模な掘り込みで、下層の堆積層は錆分を多く含む粘質土であり、壁面も錆分に変質しているところが認められることから、水を満たした施設であったと推測され、SD01が西側の端部付近で立ち

上がっていることから、一時期ある施設の最も奥に当たる部分であったと考えられることから東側に位置する相模川から引き込まれた船着場ではないかとも想像されます。

また、調査区中央付近で確認された溝状遺構(SD05)は、覆土はブロック状の褐色土が多く含まれ締りがないものですが、底面付近の覆土は鉄錆分を含む粘性の強いもので、底面付近の覆土中から近世以降の磁器の土瓶が出土したことや、調査地点の付近に用水路が通っていた、との伝承が存在することから、本跡がそれにあたるのではないかと推測されます。



第2図 遺構配置図(縮尺1/150)



写真1 調査区全景（南側上空から）



写真2 SD01 遺物出土状況（東から）



写真3 SD01 遺物出土状況（西から）



写真4 調査区西側 SD02 全景（東から）



写真5 調査区東側 SD02 全景（西から）



# 平塚市教育委員会実施の発掘調査成果（令和3年度）

中嶋 由紀子  
平塚市教育委員会

## ◆大会原遺跡第8地点

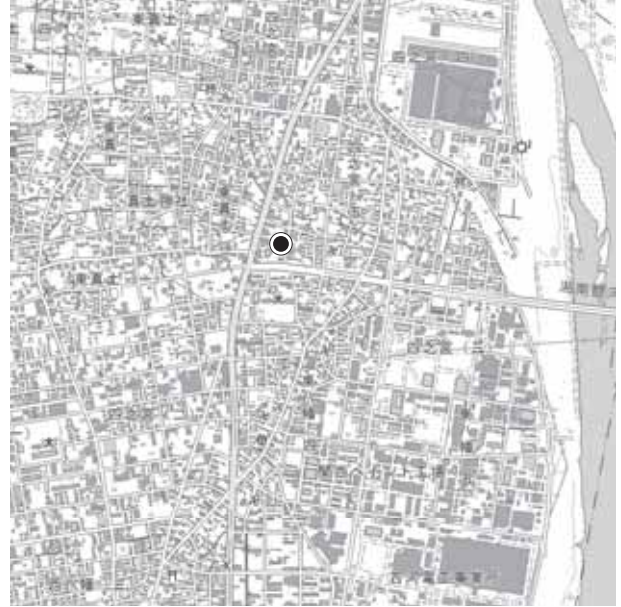
**所在地** 平塚市東真土二丁目 201 番 10  
**調査期間** 令和3年10月11日～10月29日  
**調査面積** 約19㎡  
**発見遺構** 竪穴住居址4軒、掘立柱建物址1棟、  
土坑3基、ピット7基(奈良・平安時代)  
**出土遺物** 土師器、須恵器、鉄製品、土製品(奈良・  
平安時代) 整理箱3箱

### 1. 遺跡の立地

大会原遺跡は標高約9mの砂州・砂丘上にあります。砂州・砂丘から堤間凹地へと変化する地点にあり、北側が緩やかに低くなる地形となっています。この辺りは相模国府域の北東辺にあたと想定されており、奈良・平安時代の相模国府に関連する遺構や遺物がこれまでも多く確認されています。

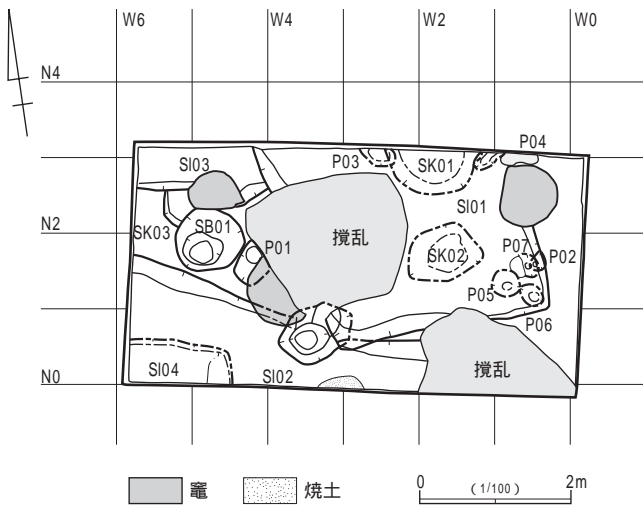
### 2. 調査成果

第8地点では、現地表面下10～20cm下で奈良・平安時代の遺跡が確認されました。1号竪穴住居址



大会原遺跡第8地点調査位置図（縮尺1/25,000）

(SI01)は、住居址の中央が攪乱され壊れてしまっていたのですが、攪乱を免れた西側の竈からは土師器の甕などが出土しました。また、掘立柱建物址を構成する柱穴が2基確認され、3間×1間以上の、調査区南西外に展開する建物址になると思われます。周辺は奈良・平安時代の建物址が多数確認される場所で、この第8地点でも周辺の遺跡と同様に建物址が重複する状態を確認しました。



大会原遺跡第8地点遺構配置図（1/100）



大会原遺跡第8地点全景（西より）

## ◆構之内遺跡第 8 地点

所在地 平塚市四之宮一丁目 961 番 9

調査期間 令和 4 年 1 月 17 日～1 月 26 日

調査面積 約 18m<sup>2</sup>

発見遺構 竪穴住居址 1 軒、掘立柱建物址 1 棟、  
道路状遺構 1 条、土坑 4 基、ピット 3 基  
(奈良・平安時代)

出土遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、銅  
製品 (奈良・平安時代) 整理箱 1 箱

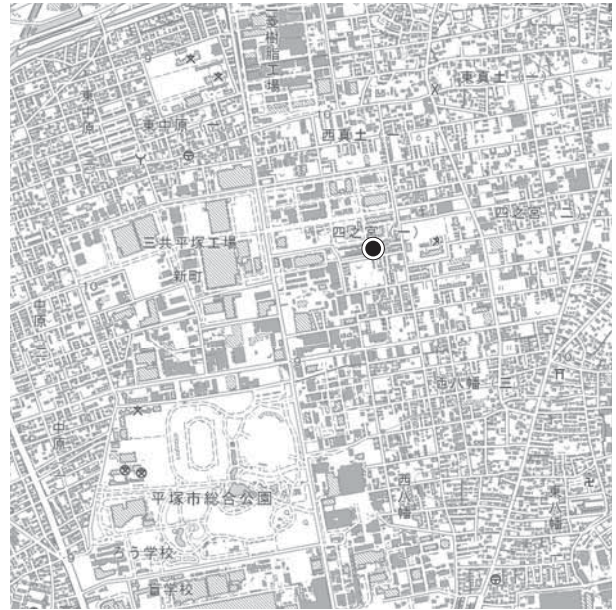
### 1. 遺跡の立地

構之内遺跡は、標高 9.5 m の砂州・砂丘上にある遺跡で、平塚の海岸線からは北に約 4 km、相模川からは西に約 2 km の位置にあります。遺跡の範囲は砂州・砂丘列の第 3 列から凹地を挟んで第 4 列に跨っており、遺跡範囲の南寄りにある第 8 地点は第 4 列上に位置しています。

構之内遺跡は、奈良・平安時代の遺構・遺物が数多く確認される遺跡で、相模国府の関連遺跡が集中する範囲に含まれる遺跡です。竪穴住居址や掘立柱建物址といった遺構の他に、土師器や須恵器、墨書のある土器や緑釉陶器、灰釉陶器、金属製品の出土も多く、鉄製の焼印、銅印、皇朝十二銭等の特殊遺物とされるものが数多く発見されています。また、構之内遺跡北側では東海道とされる幅 11 m の道路状遺構が発見されています。

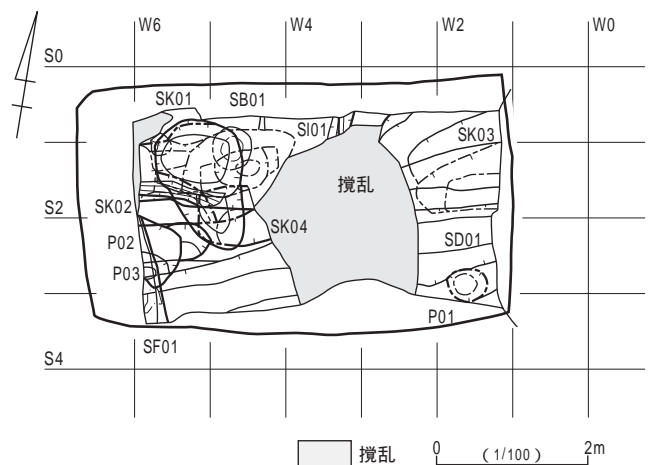
### 2. 調査成果

調査区中央が後世の掘削により約 1/4 が大きく削られてしまっていました。第 8 地点からは、南北に延びる道路状遺構 (SF01) と、その下には東西に延びる溝状遺構 (SD01) が確認され、ここからは土師器片が数点出土しました。また、調査区北西端からは、部分的ではありましたが、竪穴住居址 (SI01) を 1 軒確認しています。竪穴住居址の下からは掘立柱建物址 (SB01) を構成すると考えられる柱穴を 1 基確認しました。建物の大部分は調査



六ノ域遺跡第 18・19 地点調査位置図 (縮尺 1/25,000)

区外に残っているものと思われます。この竪穴住居址と掘立柱建物址からは銅製品の小破片が出土しました。調査の結果、遺構が幾重にも重なって確認されることから、遺構密度の高い地点であるといえます。



構之内遺跡第 8 地点遺構配置図 (1/100)



構之内遺跡第 8 地点全景（東より）



1号竪穴住居址（南より）



構之内遺跡第 8 地点出土遺物

## ◆大畑 A 遺跡第 1 地点

所在地 平塚市高根字大畑 375 番 13  
調査期間 令和 3 年 6 月 16 日～7 月 7 日  
調査面積 約 18m<sup>2</sup>  
発見遺構 竪穴住居址 2 軒（弥生時代）  
出土遺物 弥生土器 整理箱 5 箱

### 1. 遺跡の立地

大畑 A 遺跡は大磯丘陵の北東端に立地する遺跡で、標高約 60 m の高さにあります。遺物散布地として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されていますが、土師器が散布する地点と把握されるものこれまで発掘調査に至った例はなく、詳細がわからない遺跡でした。周辺にある遺跡のうち、大磯丘陵裾東側の扇状地上にある笹本遺跡では、過去 2 回の調査で弥生時代中期後半～古墳時代の竪穴住居址や溝状遺構、平安時代や中世以降の溝状遺構、土坑などが発見されています。大畑 A 遺跡と笹本遺跡の間にある丘陵東斜面には古墳時代後期ごろの高根横穴群があり、26 基の横穴墓と土師器、須恵器、鉄鏃、金銅製品、勾玉やガラス玉などの装飾品が発見されています。

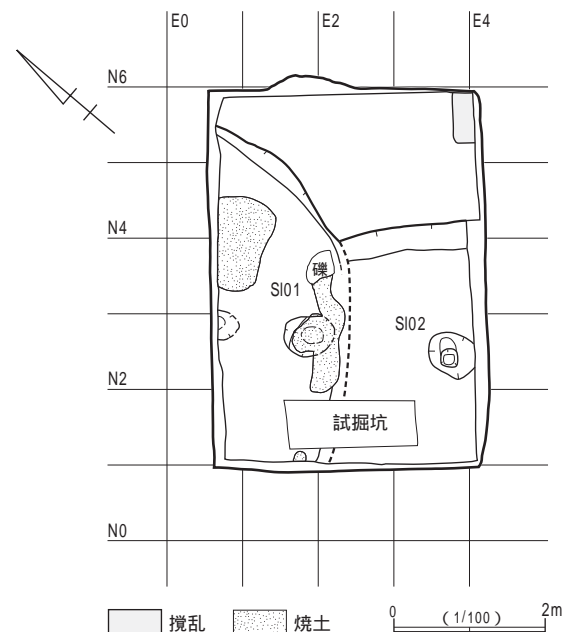
### 2. 調査成果

第 1 地点の調査では、2 軒の竪穴住居址を確認しました。1 号竪穴住居址（SI01）は床硬化面上に炭化物や焼土が多く堆積しており、住居址の中央付近と思われる所からは、壺や甕などの土器がほぼ完形に近い状態で積み重なるようにして出土しました。炉址が付近にあるかと精査しましたが、該当するものはなかったので、おそらく北西側調査区外にあるのではないかと考えられます。2 号竪穴住居址（SI02）は 1 号竪穴住居址より古い住居址で、床上からは大型の壺が潰れた状態で出土しました。これらの出土遺物から 1 号竪穴住居址は弥生時代後期、2 号竪穴住居址は弥生時代中期後半の住居址と考えられ、大磯丘陵上の東端にも弥生時代の遺構が存在



大畑 A 遺跡第 1 地点調査位置図（縮尺 1/25,000）

することが明らかになりました。この第 1 地点の西側には緩やかな斜面が広がっており、集落の存在を予見させる地形であることから、今後の調査成果に期待したいところです。



大畑 A 遺跡第 1 地点遺構配置図（1/100）



大畑 A 遺跡第 1 地点全景（南西より）



1 号竪穴住居址遺物出土状況（南東より）



2 号竪穴住居址遺物出土状況（北西より）

## ◆真田宮ノ前遺跡第1地点

所在地 平塚市真田一丁目 1237番 3,1237番 5

調査期間 令和3年5月10日～5月31日

調査面積 約22m<sup>2</sup>

発見遺構 土坑6基、土坑墓1基、ピット8基(中世)  
竪穴住居址7軒、溝状遺構1条、不明  
遺構1基(古代～弥生時代)

出土遺物 弥生土器 整理箱2箱

### 1. 遺跡の立地

北金目台地の北東端に立地する遺跡で、東に面した緩斜面上の標高約22mに位置しています。真田宮ノ前遺跡の西側は、区画整理事業に伴う大規模発掘調査により、中世の真田城関連遺構や、奈良・平安時代の居住域、弥生時代から古墳時代の集落跡や墓域が確認されています(真田・北金目遺跡群)。

### 2. 調査成果

遺構確認面は2面にわたり、第1面では中世の柱穴や土坑が確認され、第2面では古代～弥生時代の遺構が検出されました。第1面の中世に相当する面では、方形の柱穴や土坑を確認しました。第2面の古代～弥生時代に相当する面では、7軒の竪穴住居址と1条の溝状遺構を確認しました。この中では溝状遺構(SD01)が一番古い遺構と考えられます。西隣で実施された真田・北金目遺跡群での調査成果から推測して、弥生時代後期頃の方形周溝墓となる可能性があります。北側壁面下で検出しましたが、遺構を確認した高さが現地表面から1.6m下でありましたので、崩落の危険性や安全面を考慮して一部分を調査するに留めました。東側から撮影した全景写真の右端に1号溝状遺構が写っています。

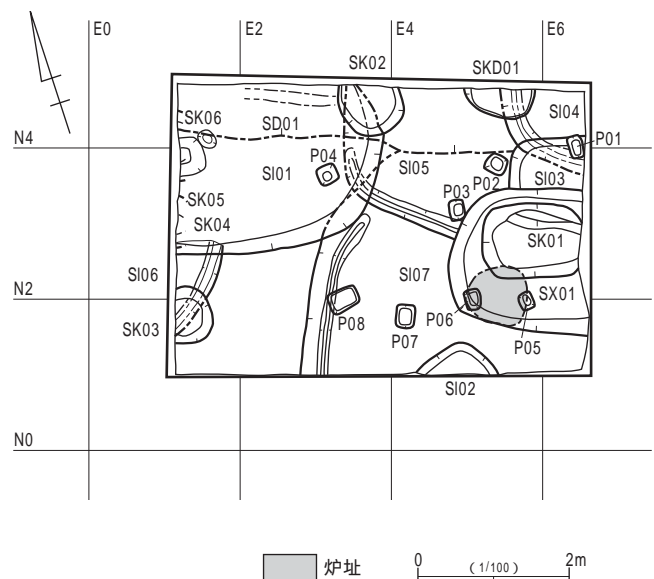
7号竪穴住居址(東より撮影した全景写真左手前)は住居址の約1/4を検出しました。炉址を1基確認し、弥生土器破片が数点出土しています。

このように第1地点では、竪穴住居址が複数重



真田宮ノ前遺跡第1地点調査位置図(縮尺1/25,000)

複して構築されていることが判明しました。真田・北金目遺跡群でも弥生時代から古代にかけての建物址が多数検出されていますが、東にある真田宮ノ前遺跡からも同様の遺跡が存在することが今回の調査で判明しましたので、北金目台地のもう少し東側にまで集落や墓域が広がることが予想されます。



真田宮ノ前遺跡第1地点遺構配置図(1/100)



真田宮ノ前遺跡第1地点全景（東より）



真田宮ノ前遺跡第1地点全景（北より）



中世面確認遺構

第 10 回平塚市遺跡調査・研究発表会 誌上発表

令和 5 年 3 月 31 日発行

平塚市教育委員会 社会教育部 社会教育課 文化財保護担当